１．件名：福島第一原子力発電所における循環注水冷却・滞留水等に係る定例会
２．日時：令和３年５月２８日（金）１０時０５分～１１時５５分
３．場所：原子力規制庁　１８階会議室
４．出席者
原子力規制庁
原子力規制部　東京電力福島第一原子力発電所事故対策室
大辻室長補佐、知見主任安全審査官、新井安全審査官、横山係長、久川係員
澁谷企画調査官、高松専門職、髙木技術参与（テレビ会議システムによる出席）
検査グループ　専門検査部門
南川主任原子力専門検査官
福島第一原子力規制事務所
黒川原子力運転検査官（テレビ会議システムによる出席）
東京電力ホールディングス株式会社　福島第一廃炉推進カンパニー
福島第一原子力発電所　担当１４名（テレビ会議システムによる出席）

５．要旨
- 東京電力ホールディングス株式会社から、資料に基づき、主に以下の説明があった。
  - 原子力規制庁と協働で実施した２号機オペレーティングフロア（以下「オペフロ」という。）調査結果について
    - ✓ 事故分析や廃炉作業のインプットとして、シールドプラグの隙間及び下部にあると想定されるセシウムからの散乱線の影響や天井の表面汚染密度を評価するため、オペフロの床面及び天井面の調査を本年 4 月 14 日～4 月 15 日に実施した。
    - ✓ 調査の結果、シールドプラグ上部で高かった空間線量率には、エネルギーの低い散乱線の影響が大きいこと、また、天井の表面汚染密度が高く、空間線量率への寄与が無視できないことを確認したことから、今後実施する除染及び遮へいによる線量低減効果が十分期待できる見込みである。
    - ✓ 今後は、オペフロ環境の目標線量１ mSv/h 以下を達成すべく、除染作業と遮へい設置作業を進める。
  - １～３号機の原子炉の冷却に必要な注水量について
    - ✓ 原子炉圧力容器底部温度を 80℃以下にするために必要な注水量の値は、季節ごとの気温変化に影響される注水温度と崩壊熱で評価しており、至近１年間の評価結果は１ m^3/h 程度である。
    - ✓ 実際の注水量は、上記の必要な注水量に対して運用上の余裕などを考慮した目標注水量を定めている（現在の目標注水量は、3.0 m^3/h）。
  - 使用済燃料プール水質状況について
  - 多核種除去設備（以下「既設 ALPS」という。） 本格運転の概要について
    - ✓ 既設 ALPS については、現在ホット試験中というステータスであり、設備不具合等により本格運転のために必要な手続きが順延していた。
    - ✓ 現在、ホット試験での処理前後の水に対する除去対象 62 核種の分析を進めており、全 3 系統のうち 2 系統の除去性能が確認できたことから、既設 ALPS の除去性能に関する実施計画の変更認可申請及び使用前検査の受検に必要な手続きを進めたい。

- 原子力規制庁は、上記説明を受けた内容について確認するとともに、
  - １～３号機における実際の注水量について、現状必要注水量に対して約 3 倍の 3.0 m^3/h としているが、今後実際の注水量を低減する予定や方法に関する検討

について説明すること。

- 使用済燃料プールの水質状況について、Cl（塩化物イオン）の濃度が上昇傾向にある理由を説明すること。
- 既設 ALPS について、これまでの設備不具合、認可・検査実績等を含む詳細経緯を説明すること。
- 既設 ALPS と同様にホット試験の状態にある高性能多核種除去設備について、高性能容器に収納する廃棄物の発生量低減の観点で使用する予定があるのかなど、今後の取扱いを説明すること。

等を求めた。

６．その他

資料：

- 原子力規制庁と協働で実施した２号機オペレーティングフロア調査結果について
- １～３号機の原子炉の冷却に必要な注水量について
- 使用済燃料プール水質状況について
- 循環水冷却スケジュール
- 使用済燃料プール対策スケジュール
- 燃料デブリ取り出し準備スケジュール
- 多核種除去設備 本格運転の概要について